

JAPAN HERITAGE
日本遺産

館林の里沼

みんなで見守る

地域の宝
茂林寺沼湿原

館林市「日本遺産」推進協議会
（館林市教育委員会文化振興課）

── 目 次 ──

茂林寺沼湿原ってどんなところ？

湿原の生い立ちをさぐる …… 1
分福茶釜の茂林寺と茂林寺沼湿原 …… 4
宝の山だった沼と湿原 …… 6

茂林寺沼湿原の危機

かわりゆく沼と湿原 …… 8
人々の営みに寄り添って生きてきた湿原の植物たち …… 10
あなたは誰!?　増加する外来生物 …… 12

地域でできる湿原の保護

まだいる！貴重な生きものたち ―こんな生きものが増えれば健康体― …… 16
湿原の乾燥化を防ぐ …… 24
湿原を健康にする手立て …… 26
かつての湿原とのかかわりを見直そう ―健康は生活改善から：お年寄りの経験や知恵を生かす― …… 28
びっくり仰天！　絶滅種の復活 ―過去からの贈り物― …… 30
カキツバタの増殖 ―かつての湿原に戻す第一歩― …… 34

進行役：ぽんちゃん（館林市観光マスコットキャラクター）
　　もりん爺（じい）（昔の茂林寺や茂林寺沼湿原をよく知るお爺さん）

ぽんちゃん「今日は群馬県の天然記念物、『茂林寺沼及び低地湿原』（茂林寺沼湿原）をいっしょに学んでいこうぽん！」
もりん爺　「わしでよければ案内するぞ。上の写真はのぅ、昭和50年代のころ、まだ周りに家も少なくて、湿原が豊かだった頃じゃ。まだその頃はぽんちゃんみたいな子供がよく湿原で遊んでたんだがのぅ。
まずはどうやってこの湿原が生まれたのか、探ってみるかのぅ。タ～イムスリッパ！」
ぽんちゃん「もりん爺、タイムスリップだぽん」



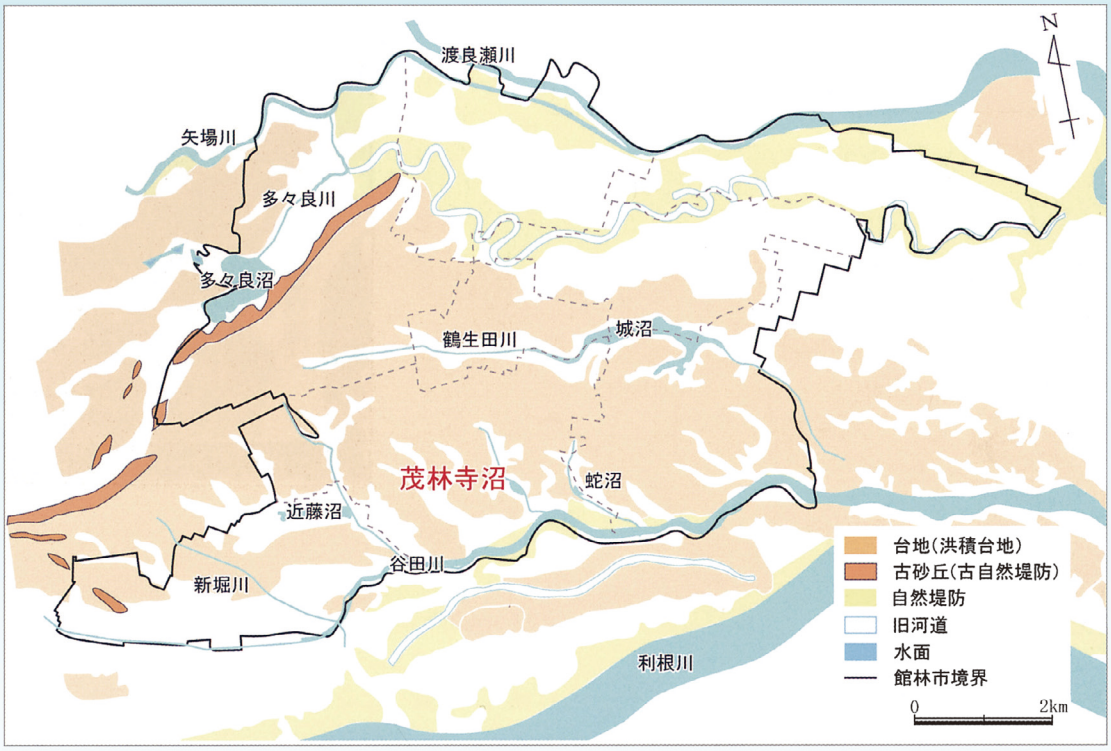
ぽんちゃんともりん爺が解説します。

表紙：早春の茂林寺沼湿原を彩るノウルシの群落とハンノキの新緑

茂林寺沼湿原ってどんなところ？

湿原の生い立ちをさぐる

館林市には茂林寺沼のほかにも、多々良沼、近藤沼、城沼、蛇沼などの沼が沢山あり、周りには湿地が広がっています。では、どのようにしてこれらの沼や湿地が生まれたのか、昔にタイムスリップしてみましょう！



東京湾だった関東平野

今からなんとおよそ13万年前の大昔！寒い氷期と氷期の間の時代で、温暖な間氷期という時代でした。

地球は今よりずっと暖かい気候で、北極や南極の氷は溶けていました。その分、海水が多くなり、関東平野のほとんどは海の底でした。海岸線は隣の板倉町あたりまできていて、館林市のあたりは河口付近だったようです。北関東は地盤の沈降地帯でもあり、川が運ぶ土砂が少しずつ積っていきました。



13万年前ころの関東平野

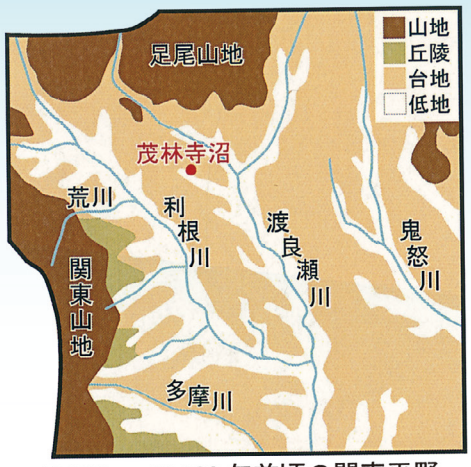


大陸と陸続きだった日本列島

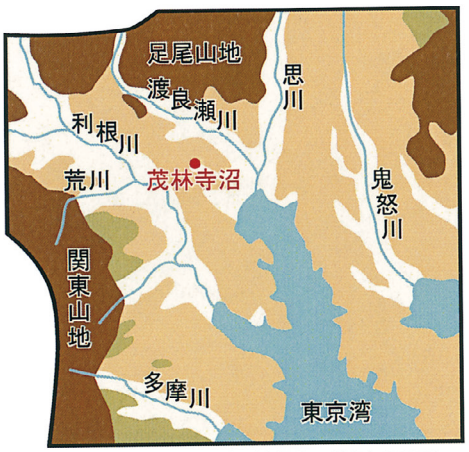
およそ７万年前になると、氷期が訪れ、今よりずっと寒い気候になりました。北極や南極の氷が増えた分、海水が少なくなり、海が引いて陸が現れました。前の時代に川が運んだ土砂でできた小高くゆるやかな土地が陸にあらわれ台地になりました。茂林寺沼湿原のまわりでは、野鳥の森や茂林寺などの林があるところが台地です。

およそ２万年前頃、氷期の最盛期には、海水面はなんと今よりも100m くらいも低下しました。日本列島は朝鮮半島、サハリンとつながり、ユーラシア大陸と陸続きとなっていたのです。

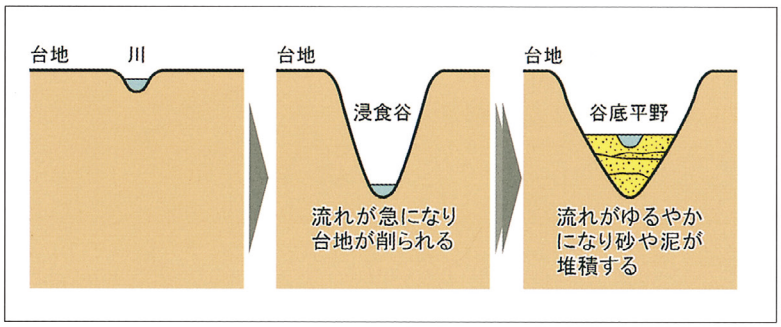
その間、館林の台地は、むかしの渡良瀬川や谷田川によって削られていきました。海が遠くなって川の流れが急になったのです。こうしてゆるやかで平坦な台地に浸食谷と呼ばれる谷ができはじめたのです。



18,000 ～ 20,000 年前頃の関東平野



5,000 ～ 6,000 年前頃の関東平野



浸食谷と谷底平地のでき方




板倉町から発掘された縄文時代の貝塚
（板倉町教育委員会提供）

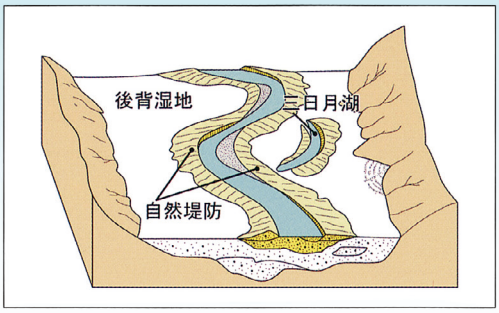
再び海が迫ってきた

およそ１万年前、氷期が終わって気候は暖かくなりました。およそ 6000 年前、縄文時代の前期は今よりずっと暖かく、隣の板倉町付近まで再び海が押し寄せてきました。板倉町からは縄文人が食べたシジミやカキの貝殻を捨てた貝塚が見つかっています。館林も、そのころ潮風が香っていたかもしれません。

海が近くなると、川の流れはゆるやかになり、浸食谷にはしだいに泥が積っていきました。狭い谷に谷底平野と呼ばれる平坦な地形ができました。すると排水不良の場所ができはじめ、館林に多くの池や沼が生まれ始めたのです。茂林寺沼湿原の谷底平野では、しだいにハンノキなどの湿地林が見られる沼沢地となりました。

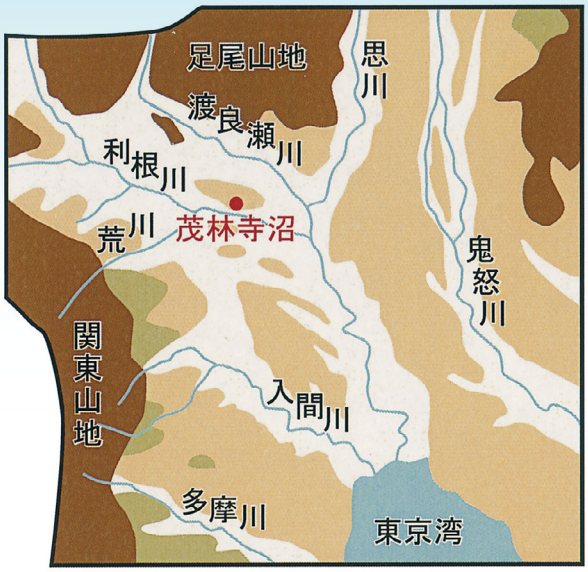
関東平野に湿地帯が広がった

およそ 3000 ～ 2300 年前、縄文時代の晩期になると、少し寒い時代がやってきます。ふたたび海面はほぼ現在の東京湾まで引いて、海の底だった部分が陸化しました。関東地方に広大な平野が現れたのです。ただ、氷期ほど寒冷ではなかったので、海水面は今より３～5m ぐらいしか下がりませんでした。そのため陸地と海岸との勾配はゆるく、川は平野を蛇行するように流れました。



自然堤防の模式図

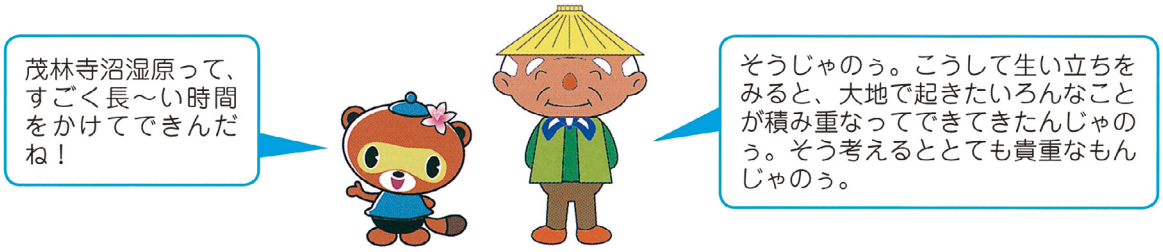
川の脇には洪水を起こすたびに土砂が積もり、自然堤防という流れに沿った小高い地形ができました。堤防の内側には後背湿地と呼ばれる排水不良の場所ができました。弥生時代の人々はこうした湿地を水田として開発したのです。



3,000 ～ 4,000 年前頃の関東平野

葦原がひろがった

茂林寺沼湿原のある谷底平野は、谷田川の自然堤防によって排水不良となり、弥生時代から江戸時代までは広い沼として続いたようです。およそ江戸時代中期頃になると、沼が浅くなり、葦原の湿原が広がりはじめました。江戸時代末期、安政２年（1855）の「封内経界図誌」を見てみると、この時代には 30 年ほど前までの茂林寺沼や小沼の姿とあまり変わりない姿となっていたことがわかります。





江戸時代末期頃の茂林寺沼湿原周辺（「封内経界図誌」の堀工村の絵図）
（館林市立資料館蔵）：安政２年（1855）

分福茶釜の茂林寺と茂林寺沼湿原

茂林寺の歴史

―正通と守鶴の出会いから―

ときは昔、大林正通という徳の高い僧侶がいました。美濃国（いまの岐阜県南部）に生まれた正通は、幼い頃に同国の龍泰寺で仏の道へ入りました。龍泰寺は曹洞宗の由緒あるお寺です。その後、各地をまわって修行していた正通は、上野国（いまの群馬県）の伊香保に立ち寄ったとき、守鶴という老僧と出会いました。正通と守鶴は一緒に旅をし、守鶴の勧めで館林を訪れ、今の地に質素な小屋を建てました。室町時代中頃の応永33年（1426）のことです。正通の徳を慕って訪れる人も多かったといいます。

正通はその後、応仁元年（1467）に相模国（いまの神奈川県の大部分）の最乗寺に移ってしまいました。しかし、その翌年の応仁2年（1468）、正通を慕っていた館林の青柳城主の赤井正光は、領地の8万坪を寄付し、立派なお堂を建て、正通を初代の住職として招へいしました。これが茂林寺の歴史のはじまりと伝えられています。

分福茶釜 ―湯がつきない魔法の茶釜―

初代住職正通に仕えた老僧の守鶴は、その後、不思議なことに代々の住職に仕えたといいます。7代目の住職のとき、千人余りのお坊さんが集まることになってお茶の用意に困っていたところ、守鶴がどこからか茶釜を持ってきました。すると、いくら湯を汲んでも尽きることがなく、飲んだ人に健康や知恵など8つの福を授けたそうです。このことから、福を分け与える茶釜として「分福茶釜」の言い伝えが残されています。



茂林寺に伝わる分福茶釜（茂林寺蔵）


曹洞宗青龍山茂林寺


江戸時代前期頃と推定される茂林寺周辺の絵図
（茂林寺蔵）



茂林寺とタヌキ —守鶴は数千年生きているタヌキだった!?—

正通と出会ってから、代々の住職に仕えたという老僧の守鶴。不思議とその正体を知る者はいなかったといいます。しかし、10代目の住職につかえていたとき、守鶴はうっかり正体を見破られてしまいました。

実は、数千年以上生きていたタヌキだったのです。守鶴は正通への恩などを語った後、ここにいるわけにはいきませんと、一瞬で飛び去ってしまったそうです。天正15年（1587）のことでした。それ以来、茂林寺ではお堂を建てて守鶴を祭っています。

後に、この話を元にした童話「文福茶釜」が明治時代に発表され、茶釜から顔や手足を出して綱渡りするタヌキの姿が広く世に知られることになりました。



茂林寺の守鶴堂



明治時代の童話、日本昔噺（むかしばなし）「文福茶釜」



月岡芳年（つきおかよしとし）画「新形三十六怪選（しんけいさんじゅうろっかいせん）」
（「茂林寺の文福茶釜」より）

茂林寺と茂林寺沼湿原

昔は、檀家（だんか）さん100～120人規模で、冬にヨシ刈りを行っていたそうです。そのヨシは資源として、本堂などの屋根材として、茅葺（かやぶき）に使われていました。

しかし、平成18年（2006年）を境に、茂林寺沼湿原のヨシを茅葺に使うことができなくなりました。年々湿原が乾燥して、ヨシの生育が悪くなり、他の雑草が混じるようになったため、茅葺の材料として適さなくなったのです。

いまは、渡良瀬遊水地のヨシを使って茅葺の葺き替えが行われていますが、湿原の状態が良くなってくれば、ふたたび茂林寺沼湿原のヨシを茅葺にすることができるかもしれません。



茂林寺の本堂の茅葺屋根



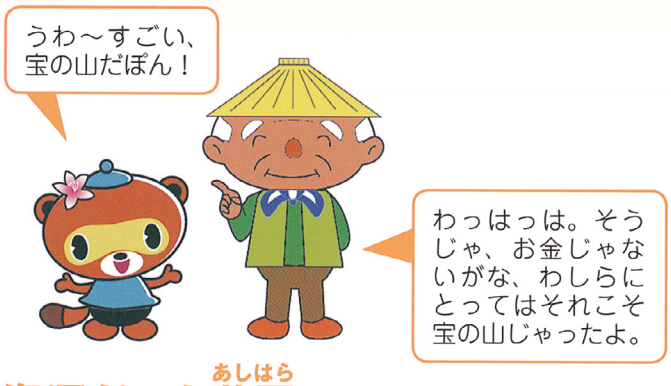


昭和30年代のヨシ刈りのようす（大阪府高槻市鵜殿（うどの））

宝の山だった沼と湿原

原風景

ここでは明治時代から昭和 30 年代頃にタイムスリップします。歴史資料や地元の人からの聞き取りから、当時の人々の水辺の営みについて見てみましょう。





農民家の茅葺

資源だった葦原

茂林寺沼湿原の葦原は、うっそうとした手つかずの原野ではありませんでした。葦原に生える植物を資源として利用していたのです。

ヨシという植物があります。ヨシはアシとも呼ばれ、その名の通り葦原の代表的な植物です。茎は真っ直ぐに伸びて 3m になり、枯れるころには硬くなります。丈夫で細長い茎は人間にとってまたとない材料でした。そのため、茅葺の屋根材として、葦簀のすだれとして、また余った屑葦は燃料として利用されました。

葦原に生えるスゲの一種に、カサスゲという植物があります。カサスゲもヨシと同じように、葦原には多い植物で、資源としても沢山ありました。

カサスゲの長い葉は簡単に折り曲げることができ、繊維質で丈夫でした。そのため、竹などで作った骨組にこの葉を編んで菅笠が作られました。カサスゲ（笠菅）の名はここからきています。



菅笠



葦簀

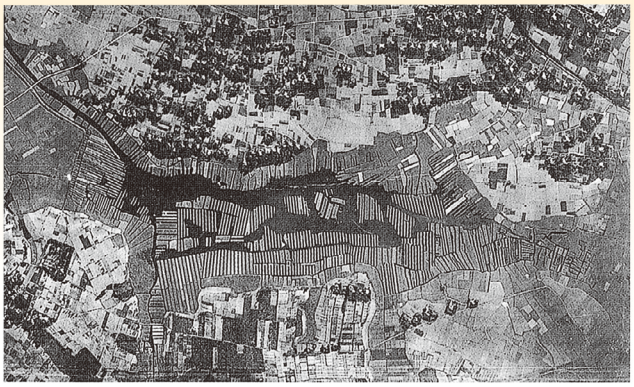
稲作の適地だった湿原



昭和 30 年代の茂林寺沼

昭和 30 年代の写真を見てみましょう。四角い区画が茂林寺沼のまわりに広がっています。これらはみな水田でした。イネは水が多い場所でないと上手く育ちません。今では圃場整備が行われて用水路が張り巡らされているため、水田はどこでも見られますが、昔は稲作に適した場所はそれほど多くはありませんでした。

当時、離れた場所に水を運ぶ灌漑の技術もありましたが、無理して乾いた土地に造った田んぼ（陸田と言ったそうです）では、イネの育ちが悪く、採れたお米も美味しくなかったと言います。それに対して、茂林寺沼の周りで採れたお米は、それはそれは美味しかったのだそうです。まさに湿原は稲作に適した土地だったのです。



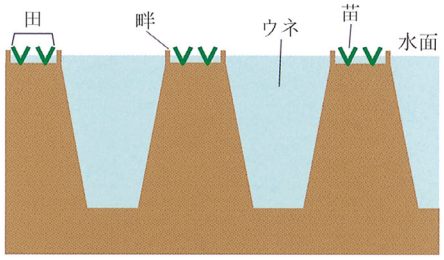
近藤沼の掘り上げ田（昭和 22 年国土地理院撮影）



茂林寺沼の掘り上げ田（昭和 12 年旧図写）

「掘り上げ田」とは、葦原のヨシを除去してつくった田んぼです。間には排水路を掘り、掘った泥は田んぼに盛っていたので、櫛の歯状の形になりました。近藤沼付近や茂林寺沼の南西の谷田川沿いなどには、見事な掘り上げ田がみられました。

茂林寺沼の周りでも、こうした掘り上げ田がみられました。沼の底の泥を田んぼに盛り、わんど状のウネは、船着き場として利用していたそうです。



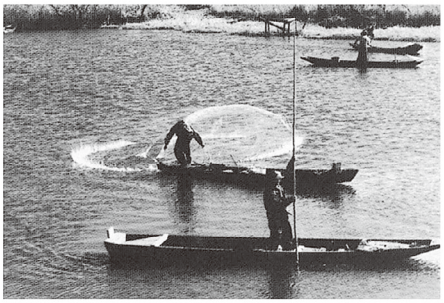
掘り上げ田のしくみ

恵みの茂林寺沼と観音堀

昔の茂林寺沼ではウナギ、ナマズ、コイなどの魚や、テナガエビがよく採れたと言います。若芽が食用になるジュンサイという水草もたくさんありました。こうした魚類やジュンサイを料亭に卸して生計を立てていた方もいたといいます。

その頃茂林寺川は現在とは異なり、湿原内を北から南に流れる小川でした。小川の上流には豊富な湧水があり、その水をそのまま使う漬物屋もあったくらいだといいます。また、茂林寺沼の下流の水路は観音堀とよばれていて、現在と異なり谷田川に直接注いでいました。この観音堀にも豊富な湧水があり、釣りの餌にする赤虫（ユスリカの仲間の幼虫）がたくさん採れ、釣り具屋に卸して生計を立てていた方もいたようです。

茂林寺沼や観音堀の自然は、かつてそれほど豊かだったのです。



城沼での漁勞のようす（昭和 51 年）



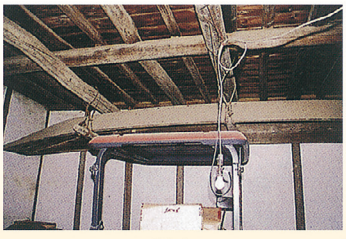
ジュンサイの若芽

豊富な湧水

かつては茂林寺沼の南側の水田や、観音堀、湿原に流れ込む堀、茂林寺沼の底、湿原のへりなど、周りより少し低い場所に豊富な湧水が出ていました。その水はとても澄んでいて、真夏でも身震いするほど冷たかったそうです。お土産屋が立ち並ぶ辺りでも、かつては数メートル掘れば地下水が湧き出したといいます。

水害とともに暮らす

沼や湿地帯とともに暮らすということは、その恩恵を受ける一方で、たびたびの増水との戦いでもありました。そのため、昔は洪水時の避難用として軒先に舟を吊るして備えました（揚舟）。大事な食糧をおさめた蔵も、洪水から守るため、土盛りをした上で建てました（水塚）。昔は湧水も多く、腰まで浸かってしまうようなゆるい泥質の田んぼ（泥田）が多かったといいます。そこで活躍したのが、稲刈りなどの作業時に用いる田舟です。このように私たちの住む館林や板倉地域では、先人たちの経験と知恵によって、水とともに生きる文化が育まれてきました。



揚舟



水塚



田舟を使った稲刈り

茂林寺沼湿原の危機

かわりゆく沼と湿原



湿原の中央にある遊歩道は中央園路と呼ばれ、茂林寺から茂林寺沼橋を通って茂林寺川に至る道になっています。

この中央園路は、戦時中に整備されたのが最初のようです。最初は土盛りの道でしたが、湿原は地盤がゆるいので、次第に道が埋没してしまい、何度も土盛りされました。最終的には砂利が敷かれ、その砂利も何度か敷き直されました。

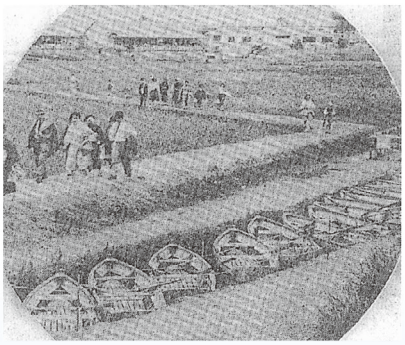
そのため、中央園路の地下には大量の土砂や砂利が埋まっていて、それが地下水の流れを遮断することで、園路の東側の湿原が乾燥化していることがわかってきました。



昭和 49 年（1974）の茂林寺沼湿原周辺（国土地理院撮影）

湿原の埋め立て

昔は、東武伊勢崎線茂林寺前駅の周囲も湿原で、北方は国道 354 号線の近くや美園小学校の敷地も湿原でした。そのくらい広かった湿原も、次第に埋め立てられ、住宅地やゴルフ場などに変わっていきました。



昭和 30 年代頃の中央園路



湿原に流入する雑排水（昭和 60 年）

水質の悪化

昭和 30 年代半ば以降、合成洗剤が普及しはじめました。増加した住宅地から茂林寺川に流れ込む生活排水や未処理の下水によって、湿原の水質が悪化していきました。